

# 社会交変換論Ⅲ：[超] 組織個体記述への 「認識－方法」／「形式－内容」連関（1）

長谷川 博

## はじめに

まずは、系統論的ホーリズム（全包括主義、亜総体主義）の認識論とこれが関係主義を方法論とする所以に言及する。つぎに、方法論的個人主義／方法論的集合体主義における実体主義の相克があり、関係主義がどのように行われるかを性格づける、構造－現象－解釈にかかわる方法の方法に言及する。そして、本論の内容にかかわる拡張進化論、およびそれとしての遺伝子－文化共進化論に本稿は言及する。

## 1 系統論的ホーリズムと関係主義

第1に、物質系については標準理論がある。その物質系の上に生命系の次元が披かれたのは、原始大気、熱水噴出孔、そして隕石中にも見出されるヌクレオチドを素材とする核酸という高分子に、情報、エネルギー、自己触媒という自己複製の3条件が性質として備わり、それが遺伝子・遺伝的自己複製子として働くようになったからであるなどといわれる<sup>(1)</sup>。このようなことが特殊な物質系すなわち生命の発端であるといわれる以前に、遺伝子が現在まで維持され進化してきたのは、遺伝子はその他の分子を自己複製と自己増殖のために奉仕させるからであり、細胞ができたのはその自己増殖を確実にする環境との境界を確保するためであり、個体ができたのは遺伝子を次代に伝えるためであるという利己的遺伝子説が広まっていた。そこでは、生命個体や個体群ではなく「遺伝子を進化の単位」とみなすことで、生命を遺伝子の生命機械・ヴィークルと表現した<sup>(2)</sup>。自己複製子について、能動的／受動的、生殖系列／行き止まりの交差による4区分が考えられ、とりわけ成功する生殖系列の能動的自己複製子の世界への効果を、適応とみている。自己複製子とは「この世にあって、そのコピーがつけられる何らかのもの」と定義され、遺伝的自己複製子は「勝利を得る形質と敗北に終わる形質の差異をつくる遺伝的物質一片」をいうのかというベイトソンの疑念がドーキンス自身の立場を正確に捉えていると表明している<sup>(3)</sup>。

遺伝子－細胞－個体－個体群－群集は、いずれも自己触媒能を有する有機体「系統」であるが、遺伝子の能力に限界がないとすれば、心（論理と感情）や、心によってつながった遺伝子によらない情報伝達体系である文化社会、その単位である文化子もすべてが、遺

(1) C. マラテール／佐藤直樹訳、2013。以上では、生命起源に関する諸説が紹介されている。

(2) R. ドーキンス著／日高敏隆・岸由二・羽田節子訳、1980。R. ドーキンス著／日高敏隆・岸由二・羽田節子・垂水雄二訳、2006。

(3) Dawkins, R., 1982, p. 92.

伝子の拡張された表現型となる。ゆえに、遺伝子決定論<sup>(4)</sup>は、つまり環境決定論以上の決定論となり、社会科学にとっての「不都合な真実」とされた。

第2に、しかしながら、物質を規定する物理法則（エネルギー、エントロピー）を内包する遺伝子法則（シグナル、デジタル）が生命を規定し、それをさらに内包する精神法則（シンボル、アナログ）が立てられる、というのが物質-生命（遺伝子、細胞、個体）-人間（遺伝子、心身）の「系統」論である。精神法則については、認知心理学、神経科学、エナクティブ認知科学などの統合によって、たとえば価値、意志、あるいは自己理解志向——超越論的自我または間主観的自我から解釈学的自我へ——により規定できるという仮定がある。ゆえに、生物がどのような生き方をするのかを決める際の予測能力が、遺伝物質から生物個体そのものへと少しずつ置き換えられていく傾向にあるとみるときに、心は遺伝子に支配されているのではなく、心は遺伝子の支配を超えて出ているのではないか——強調すれば、環境由来でも遺伝子由来でもない生物由来——といわれる。そして、生命系の上に精神系が披かれたとする、遺伝子からつくられた脳についてのつぎのような仮定が置かれた。すなわち、神経細胞を素子とする神経系内でまずは記憶（感覚情報のストック化とそのストックからの引出・想起）が可能となり、記憶によりすべての情報がフローとならずストックされることで生理的時間認識と空間認識そして因果性認識が生まれ、なおかつ遺伝子の場合と平行だが、神経系が、記憶という情報、神経細胞の活動というエネルギー、新しい情報と記憶との照合という再帰的循環を自己触媒とした自己複製系になったからであるとする。

心脳一元論が有力視されているが<sup>(5)</sup>、この心と遺伝子の問題は、立証と反証の未決着や反証不可能性により不可知化の様相を呈してきた。それでも、遺伝子型と表現型をつなぐいくつもの段階を含む事象である発生中に、遺伝子の働きを制御する一連の機構（たとえば細胞間コミュニケーション）をいうエピジェネティクス——エピジェネシスとジェネティクスの合成語——が、遺伝子決定論を溶解する社会科学にとっての「好都合な真実」といわれている。

第3に、以上から漸く、人間-組織個体 - [市場] 社会（[市場] 社会という組織）を、ともかく生態系（自然にある組織）につなげようとしてきた「系統」論が、物質-生命-人間の「系統」論につながることで、ホーリスティック<系統>という認識論的転回に定位する。そのもとで、「組織という概念は、実はシステムにおけるプリミティブ・タームであり、その意味内容を明らかにするのは、システムについての仮定と、仮定から演繹された帰結である<sup>(6)</sup>」ということに則せば、存在論上の組織は存在上のシステムについての系統論的ホーリズムの仮定から演繹される帰結として記述できる。すでに物理学では存在者の外的関係による機械論的秩序では解明できない領域が示されたが、このときから相対論（存在者の内的関係がある場、因果性、連続性、局所性）と量子論（存在者の不均質性を生む状況の文脈、非因果性、非連続性、非局所性）が真っ向から対立し、調停を考えだすようになり、連続と非連続の調停などとして波及している。そして、いまや「ミクロの10次元から披いている4次元の日常世界」ということになるわけであるが、以下のような

(4) ただし、分子生物学や社会生物学と、それ以前のメンデルやドーキンスとでは遺伝子の定義が異なる。

(5) アンケート調査ではみえない無意識の関心を脳波測定などで調べるニューロ・マーケティングがある。

(6) Arrow, K. J., 1974, p. 33.

ホーリスティック世界観が提起されたことは記憶に新しい<sup>(7)</sup>。すなわち、上記両論の基本了解・認識前提を特殊な抽象とみなし、両論の根底にある共有根拠の抽象として、存在総体は、連続した不可分割（浸透する境界化）の流動運動であり、分断を許さない全体をなすが、可塑性がある、というものである。また、この世界観に相応しい秩序概念として、相互作用因では説明がつかない＜内蔵秩序＞と、その顕現態でありこれまで現れた範囲の内蔵秩序に支配される垂総体として「顕然秩序」が区別された。内蔵秩序——必ずしも不変同一性を意味してはいない——から披き出され（展開し）た顕然秩序には内蔵秩序が包み込まれ（書き込まれ）ている。内蔵秩序に対し、顕現秩序は、センス（感覚、感性）に去来する秩序であり、諸法則が立てられてきた秩序である。また、内蔵秩序はそれがホーリスティックであればあるほど、説明を幾度も拒絶するようなものであり、根本的に新しい領域と新しい概念が果てしなく存在することは確かであろうという。系統論的な系列・レベル認識がAPS論にもあった。生態学においても、その基底には生物と環境が機械論的秩序領域での物理的な分析単位（基本粒子）を超えた、より高次事実としての変化と持続によって直接につながっているという確信があるといわれてきた。

本論は、系統論的ホーリズムを標榜する。よって、内蔵秩序を決定論・機械論的秩序とすることもなく、さまざまな科学のボーダレス化（相互的な包摂関係）を追認し、生命の物理主義や人間の生物主義のような還元（排他的遡源）主義に頑迷ではない。また、あくまで多元主義<sup>(8)</sup>のプラグマティズムと整合し、自然〔科学〕化（自我の可能性の条件の解明、可謬的な「事態や事象そのもの」の帰納的正当化）と超越化（経験の可能性の条件の解明、可疑的な信憑像の演繹的正当化）のテンションを受け入れる。解決問題ではないパラドキシカル・テンションを問題解決しようすれば、われわれの日常生活や社会関係がかえって混乱するのであり、「論破しつつも、論破される」、「対象化しつつ、対象化されている」、「構成しつつ、構成されている」など「～しつつ、～され〔てい〕る」というその非完結性に気づき理解すればいい。その理解が基本了解であったといえるが、対話（共通理解を探しだす／合意を形成するコミュニケーション行為）をむしろ包含するような会話（対話が困難でもコミュニケーションをつづけようとするコミュニケーション行為）を必要とするこの社会についての共生の論理があり、真理制度論にいたるような規約化があった。

第4に、主客分離の実体間関係とはいっても、古典物理学ののちの相対論、量子論により、実体概念自体がぼやけた（fuzzy）ものになった。同様にして、社会科学における個人、組織といった個体も、まずは、ある個体に起こるであろう現象の経験をすべて含むようなぼやけた概念となった。存在者は互いを表現し合うということを含み込んだ関係論では、同型の錯覚をもっていればそれを錯覚とは感じないため、事態の事実性もさることながら、事態の事象化における事実性が問題になる。また、ダイアド態から〔多元的〕ネットワーク態という無限態の中の4次元有限態にいたる関係〔性〕は、関係主義においては、関係に先行する実体項の与件としての資格を否定することで1次的存在——関係をこそ先行理解とする——と捉えかえされ、進化論／システム論においては、「発生／その後の共

(7) D. Bohm, 1980, pp. 193-196. 以上では、垂総体の法則としてその特徴が示されている。なお、ボームとの対談をも掲載したものに以下がある。J. クリシュナムルティ／大野純一・聖真一郎訳、1986。

(8) 1なる1に対する、多なる多、1なる多、多なる1の違いに関しては、以下による政治と経済を例とする許容自由度の交差が、具体的区分として理解を促進するであろう。橋本努、2008、203～211頁。

単位」と捉えられた。

4次元時空間における相互作用子(コ関係子)——「実体かつ実在」ではないもの——間の関係性といわれてきたものは、ともかく「2次化(ダブル・クロス)<sup>(9)</sup>による認識活動」をくみこむが、既述の流動運動の中にあつて「1なる多」を後述するように2様に捉えるというところにきている。また、人間関係では、不可共認的關係を含む外的關係でもそれが互いに意図されていれば、意図された無關係化であり特殊な關係性である。しかしながら、いかに締めくくるか到達点も問われるが、「連綿たる2次化」に向かうボーダレス化は、人間關係や知のホーリズムにおけるA(有徴)と非A(無徴)の絡み合いという現象の気づきが出発点である。すなわち、Aと非Aという隠蔽を含む座標系での2次化のみの遮断を跨ぎ、Bと非BそしてCと非Cというように座標系を変えて2次化をおこない關係性が付加される時<sup>(10)</sup>、外へいくほど誰かはみているが、内へ向かうほど誰もみていないものをみることができ(たとえばAをAによる不可能性の回避)、あるいはみてはいたがわかっていないと考えるようになる。そして同時に、従前の解釈や倫理決定は、常識道徳と批判道徳の關係の見直し、基礎づけ主義(帰結主義・目的論と非帰結主義・義務論のテンションそして2層化論)と整合主義(反省的均衡論)のテンションの理解と対処に向かい洗練される。むしろ關係性の付加は、単純付加・加算ではなく変換を伴う付加である。

第5に、時間的な状況の過程は、必ずしも抽象的な決定論に閉じ込め切れるものではない連続性——保持子が残っている限りでの——があるが、断片化された具體的關係としてのみ現在化し感じられる。現象の経験は、4次元のうちの諸変数が選択された変数に披いているとして、夙に描きだされ提示されてきた<sup>(11)</sup>。しかし、系統論的ホーリズムは、抽象的主観(客観)から具體的客観(主観)へ、そして高次(低次)の秩序の発現は低次(高次)の秩序の発現において顕現的(内蔵的)となる、という背理を等価なこととして抱え込む。また、そこには構造論の視角が隠れてあり、最背面にある内蔵秩序を<偏在構造>(局在構造の構造)、顕現秩序を「局在構造」(何かすなわち後述するどれかの構造)といいかえうる。構造付加は、後述するように系列内水平的／系列間垂直的に起きる。構造付加が系列間垂直的に起きるといふ点において、進化は不連続・断続である。

それでもつながっているとして、厳密科学のように不変を求めるならば社会科学も、「構造」の<構造>のような非明示的な「進化の連続性」の明示化に向かうことを捨てきれない。その訳は、構造論が看破した初期の基本了解に求められる。すなわち、[分節と参照の恣意性があるルールをつくってきた]人間の観念は、変なる／多なる現象から不変なる／1なる・普遍なる「もの」を引き出すことができるという思いなしが憑りつく言語(能記、所記)——所記は時間を孕んだ同一性——によるものであるということである。むしろ、「構造」の<構造>の明示化において、言語の限定を伴うのは社会科学だけではない。また、部分と全体を切り離し捉える認識段階にあれば還元論となる点でヤヌスの両面である「部分における無限の制限化ないし排去」と「全体における無限の制限化ないし排去」は、ミクロとマクロの相補性が存在する場合のシステム-環境の相互作用の枠組みとして

(9) 長谷川博, 2013。

(10) D. Bohm, 1980, pp. 48-64, pp. 115-118. 以上ではアリストテレス論理学から2次化への展開もみられる。

(11) J. パークリー／大槻春彦訳, 1958. 周知のように以上は、知覚されることを抜きにできない存在をいい、経験主義そして論理実証主義の基盤となった。



はなじまない。ただしこれも、相補性がないと言い切る場合の、上述の前者をもって十全である。

以上の第1から第5は、系統論的ホーリズムが、観察可能範囲 ( $10^{+28}$ m) 内の意味論的要素がもち込まれる (意味の存在を否定できない) ところで関係主義を方法論とする所以である。この場合、そのようなものが何もなかったところにアノマリーも含むモダンとポストモダンが移入されていった日本のモダンとその日本のポストモダンのいずれにもかかわるが、現象学や解釈学との離合を経る構造論を抜きにすることはできない。

## 2 構造—現象—解釈：3点動化

つぎのようにまとめられるところの、根拠へと遡る論証のアポリア、終焉の哲学という論議を踏まえたツイートがある<sup>(12)</sup>。われわれは生きている以上は乗り組んでいるのであり、ノイラートの船が顕現していることを疑ってはいない。われわれはそこから下船できず、その船は大海を引き返さない。見つけたようではあったセンス・データも自我や自我極も、そして理性も、引き返すドックのようなアルキメデス点を名乗れば僭称である。そこで、創発を認めぬ根拠を問わず、因果を認めぬ無根拠を原理主義のように居直らず問う。

基礎づけ主義とその批判の単なるいずれでもない説明様式に向かうとき、有機構成も、アルキメデス点のような不動の還元点を名乗れば同じ貶めにあうかもしれない。そこで、「1なる多」の流動・往還運動におけるメタスタビリティあるいはカオスモスをいかにかいのか、改めて整理する。

一方の謂いでは、「1個2重ないし多重の入れ子」におけるノード——スター／リエイゾン／ブリッジの型区分がある——の関係として、環界あるいはアフォーダンス・デクステリティのような弁証法的な相即という同一性 (プラトンのイデア、デカルト的自我) への投機に向かう。他方の謂いは、「多元集合体」におけるノード——そもそもノードは結節点とも頂点とも訳される——の関係として、ノード間で相互に保持される「ズレ」(凶れ、擦れ) が反射・照応しつつシミュラクル<sup>(13)</sup>になっていくからこそ、このことをもってしてむしろ同一性の延期に向かう。ここでは、あるノード集合がリンク (関係すなわち結合先／結合内容) を替えつつ、頂点・1なるものが動化し数多化し、1なる多の対が限りなく繋ぎ合わされ、多極的な1対多関係になる。1なる多の、「1の多化かつ多の1化」への読み替えである<sup>(14)</sup>。

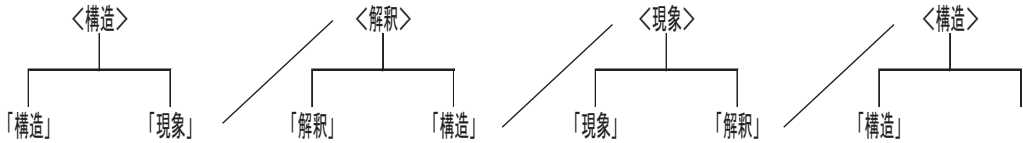
ノードすなわち相互作用子は、前者の謂いではホロン、後者の謂いではクリナメンである。この前者と後者の「間」は、カオスの縁といってもいい。そこを走る場合に相互作用子は、次稿で言及する言語観の貧困を超えようと、問わず問うという「問の問い」を発する。いふなれば、神話／科学話あるいは民話／実話に聞き浸る情緒が、ひとたびは放棄され、再構築する物語に脱移入される。以上の2様に、このような間がある。しかし、情報ベース問題ないし情報非対称性問題が必ずあるだけに、ひとたび問の問いを発したなら

(12) 野家啓一、1993、235～261頁。一部に追記を施した。

(13) ジル・ドゥルーズ／財津理記、2007 (上・下)、(上) 338～344頁、(下) 284～285頁。他ではシミュラクル。

(14) 多からの1が科学形態であり、1からの多が神学形態であるということへの懐疑と同型に、ディシプリンを多、トランスディシプリンを1とすることへの懐疑による転倒がある。

図1 2項対立縮約媒介図式



ば、後者を廃棄するよりはむしろ前者が廃棄される。そして、後者の「1なる多の対」すなわち単系列から、複数系列へそして全世界系列に至る諸系列のホーリスティック系統は、「多なる多」という多元との違いを、[無意識にも] 2次化がはたらいた「3点動化」に収束する以下の方法の方法によって担保される。

さて、言語にしかないといわれたが変換とともにある構造には、孕んだ内容から別の内容を生む特定変換の形式をつきとめることでわかる「構造」と、変換群の特定変換にこだわれば抽象化できない変換群の関係形式をいう<構造>がある。構造の中で披いている現象には、存在者(事態/事象∩存在=人間)が示してくる「現象」と、その存在者の仮象など宙づり構成ではない「そのもの」(存在∩実存)が示してくる<現象>がある。了解される現象は言語であり言語も現象であり、現象了解を記述によって仕上げる技術である解釈(釈技)には、地平のうちにある再構成としての「解釈」と、総合[以上の総合](=事実[諸事実])としての<解釈>がある。という<sup>(15)</sup>。<構造>、<解釈>、<現象>に外部はないが、これらは、その不可知性からポジティブ/ネガティブに想定され更新されるものの、必ず「そして」の残余がある。

そして、[無意識的な] 2項対立縮約<sup>(16)</sup>の一方の媒介図式でいえば、たとえば<構造>と<解釈>という2項が、双方の2重性を帯びた「ほどよい」距離の「現象」を媒介項にするというように、結果的には、つぎの3つ組の言説(図1)になって現れる。①<構造>-「現象」-<解釈><sup>(17)</sup>、②<解釈>-「構造」-<現象><sup>(18)</sup>、そして③<現象>-「解釈」-<構造><sup>(19)</sup>。距離とは、先の例でいえば、現象系列から媒介項として選ばれたバリエーションの、現象系列内の差異関係(メトニミー)における隣接度と、構造系列や解釈系列との間の類比関係(メタファー)における類似度という2因子が異質化する時間である。これらの言説は、2項の離合反復的なズレ(引用上でものズレ)を、そのまま2項の間の異質性(差異, 差延)として保存するという意味で、1に向かう弁証法に拠らない操作が

- (15) E. フッサール/細谷恒夫・木田元訳, 1954. M. ハイデッカー/細谷貞雄訳, 1926. H. ロムバツハ/酒井潔訳, 1999. H. ロムバツハ/中岡成文訳, 1983. J. B. フェージュ/加藤晴久訳, 1972. C. レヴィ=ストロース/荒川幾男ほか訳, 1972. C. レヴィ=ストロース/大橋保夫訳, 1979. A. バーマン/立崎秀和訳, 1988. C. ムフ編/青木隆嘉訳, 2002. C. ベルギー/折島正司訳, 2003. J. ラカン/宮本忠夫ほか訳, 1972. G. ドゥルーズ/中村雄二郎訳, 1973. J. デリダ/足立和浩訳, 1972. J. デリダ/若桑毅ほか訳, 1977. J. デリダ, J. D. カブート編/高橋透ほか訳, 2004. J. デリダ/林好雄訳, 2005. P. リクール/久米博ほか訳, 2005. 久米博, 2012. M. セール/竹内信夫訳, 1985. G. W. ライブニッツ/清水富雄ほか訳, 2005. 浅田彰, 1983. 橋爪大三郎, 1988. 小田亮, 1989. 以上に基づく。
- (16) ヤーコブソン/ヴェイユに基づき, D. トンプソン/柳田友道ほか訳 [1973] における座標変換 (173~199頁) から着想を得た, C. レヴィ=ストロース/大橋保夫訳 [1976] におけるもの。
- (17) たとえば, 渡辺二郎, 1994。
- (18) たとえば, M. ハイデッカー/細谷貞雄訳, 1926. P. リクール/久米博ほか訳, 2005. 久米博, 2012。
- (19) たとえば, J. デリダ/林好雄訳, 2005。

図2 「構造」の在処の区分

	[半] 実体	非実体
[半] 実在	無機物 中立選択遺伝子 被選択遺伝子	言語
非実在	生命系	多様な種 [超] 組織個体 社会

おこなわれている。これらの言説は<sup>(20)</sup>、それぞれに方法論的關係主義を性格づける。より実学的な言説には、上記の①②③が「 」-< >-「 」の3つ組になる傾向がある。

自然にはそもそも生態系はなかった。到来以来の<有機体>が、自然を生態系につくってきた。また、「有機体=人間」は、純粋交変換/特殊交変換(経済)、限定交変換/一般交変換はもとより<sup>(21)</sup>、社会交変系(交変換システム)——洗練された機能主義ないしケイパビリティ・アプローチが必要になるが——をつくってきた。そこに織り重なるのは、必然的な因果/相関の關係が書き込まれた環界秩序と、その拘束性から離心的な象徴秩序である。人間が生態学的、発生学的に不確定であるといわれるのは、契機的存在(構成素、誰も選択しないものを選択する内在的価値)といえる<人間>は、ホラーキー/ホルルキー<sup>(22)</sup>下の自他律的關係における機能的存在(要素、道具的価値)である有機体に対しなんらかの過剰/不足の留保があり、環界秩序をいつのまにか食みだすからである。その過剰/不足という意味でのズレの不協和整序となる、言語により構成され言語を再構成する象徴秩序は、相補性からの「対称性の破れ」による共時態であるが、通時態の中で断片化していく。ゆえに、ネガティブに問うしかない恣意性(無根拠性)の権利性が相互牽制のある限りで許容される諸構成と、「象徴」としての言語の解釈が、<象徴>秩序内でのズレを反復させる。

[知の] 關係性ネットワークには、生態系そのものというはおろか、いかに遡行しようと辿りつくのは始原からの上述のような「2重のズレ」でしかない現象についての、構造論的説明が了解に統合され解釈が成立するという頂点化など、3点動化がある。これが、単系列内の水平的「構造」(単系列的な知の内部に繋ぎ止めようとするコード化)、系列間の垂直的「構造」(脱コード化)、そしての<構造>(超コード化)という構造[決定]論とこれに対する実存論(コード浮遊化)との揚棄に向かわぬ方の、系統論的ホーリズムの立脚点として、全体化されることのない諸部分への配分、になじむものである。なお、一方の關係性マーケティング論は、以上からの応用マーケティング論である。

(20) C. S. パース著/C. ハートショルン, P. バイス編/米盛裕二編訳, 1985, 7~41頁。以上でいう第1性-第2性-第3性は、構造-解釈-現象と、1つの変換群をなすものである。ソシユールについては次稿で言及する。

(21) M. モース/吉田禎吾・江川純一訳, 2009。C. レヴィ=ストロース/荒川幾男ほか訳, 1972。以上の区分に拠るが、交換だけでなく変換を加える。

(22) ホロンとハイアラキー/ヘテラルキーの合成語。前者は使われているが後者は筆者の造語に近い。

図2の4区分内のものは例示である。そのそれぞれなどの「構造」間に、ある変換があり見いだされた不変なもの（もはやくり込まれぬもの）は、系統論的ホーリズムの〈構造〉である。このとき、変換をシステムの中の要素間関係を変えずに要素だけを置き換えるという「変換」とみる——神話の構造分析の誤解による悪影響といわれている——だけでなく、むしろ〈変換〉を探ることで、〈構造〉をみようとする。散逸構造は、物質系レベルの均衡系はともかく、生命系や経済系の基盤的レベルの自己維持系に対する自己組織系にもあると思う者はいるようである。ただし、散逸構造を系統的に拡張し構造論的説明とすることは、必ずしも了解に統合されてはいない。

以上の認識と方法によって現実をみるために、むろん〔超〕組織個体記述に接近するために、本稿以降で組み入れる諸論が先行論からいかに変容したかを検討し、またその変容がこれまでの論点とどのように結びついているかに言及する。

### 3 拡張進化論：総合のそして

内在主義（内因〔投射〕モデル）と対する外在主義（外因〔写像〕モデル）の、あるいは構成／説明／理論的還元論と対する創発論の頸木を離れて論理強度を弱め、生物と環境のあいだの相互作用・関係主義（たとえば「競争－協働／代替－補完」モデル）にいたる進化論の総称が、ここでいう拡張進化論である。拡張進化論は、それらの頸木を離れる以上は1元論からの多元主義になる。表現型が変異を示す集団<sup>(23)</sup>は、自然選択における「適応度の差異と遺伝可能性<sup>(24)</sup>」により生物学的な形質頻度が変化する。遺伝子（DNA）は魂に匹敵する現世的な存在だという認識があったが、遺伝子は多様性の唯一の説明ではない。そして、自然選択論－遺伝学－現代総合論－分子生物学－中立選択論、発生生物学－生態学が、その内容拡充にかかわる。これらの流れの合流や交差にはさまざまなものがある。

こうした機能生物学と進化生物学を援用しつつ、組織進化論など社会科学における進化論的接近は、記号学－記号論－生命記号論という流れを付加する。表現型が変異を示す〔超〕組織個体ないしその内にある「組織の中の組織」などの選択標的（相互作用子）は、本論初稿<sup>(25)</sup>で述べた選択螺旋における適応度差異と継承可能性および中立選択により生物学／非生物学的な形質頻度が変化する。形質頻度変化は、単に情報ストック（継承された組織個体情報のセット）の表現または実現ではなく、内部のストック／ドリフト／フロー情報など組織個体情報総体・レパートリーとその外部構成素との相互作用（相互誘導）による。形質頻度変化が表現型（独自の明確な適応型、基本形からの2次的なもの）の可塑性（環境入力に対し形状、運動、活性を変化させる能力）につながる。表現型可塑性は組織個体の正常な発生と展開の一部である。

人間が保有している形質ないし特徴とその祖先が経験していた環境因子との間に適合が観察されると、それは偶然に生じたか自然選択のみを通じて生じたかのいずれかであると仮定され、『『ほとんど』の集団における『ほとんど』の表現型は、自然選択を記述してこれ以外の過程を無視するようなモデルによる説明』として定式化される適応主義は、この

(23) 遺伝学でいう集団、生態学でいう個体群は同義であり、適宜使い分ける。

(24) Lewontin, R., 1970, p. 1. 以上が指摘する進化の必要条件である。

(25) 長谷川博, 2012。



定式化の「ほとんど」を「すべて」に置き換えれば適応主義のより強い解釈が得られるが、この強い解釈を支持する生物学者はほとんどいないだろうという<sup>(26)</sup>。つまり、自然選択をして、①何らかの役割を果たす、②重要な原因の1つである、③唯一の重要な原因である、とする論理強度の違いを指摘したうえで、③ではないということである適応主義は、それ自体は外在主義ではあるが、内在主義や相互作用・関係主義を認めるのである。であるならば、弱い解釈の適応主義は、とうに半ホーリズムである。

還元論的研究と同時にホーリスティック研究が支持され進められるようになったのは、つぎのことによる生命システムの複雑さ（非決定性）、現代総合論以後に改定された研究領域や新領域の追究——中立選択を含めリスト化されているこれらのいくつかも次稿で言及する——による<sup>(27)</sup>。①非生物界には相当するものがない個体群、②目的論的ではない目的律的活動と機能的活動、③多元的な因果関係。同種の個体には、他の個体にない一部の特徴はあるが、特徴の組み合わせによる独自性がある。目的律的志向性は、遺伝子型に完全にコードされている閉鎖プログラム（遺伝的プログラム）と、追加情報を組み入れることができる開放プログラム（身体／神経的プログラム）の2重性による。生物における目的律的過程を制御するプログラムは、高度特殊的／反応基準（反応パターン）的である。原因については物理化学とは異なり、至近因と究極因（機能生物学が対象とする内在／外在的な生理的要因、進化生物学が対象とする生態／遺伝／文化的要因）の両方を生物現象研究は必要とする。結果については、適応性だけでなく適応度改善にかかわらない繁殖成功行動も考慮される。人間の倫理については、そのすべてが包括適応度に基づいた本能的・利己的な利他行動そのものであると考える者がいるが、これに対し意思決定に基づく互恵的利他行動<sup>(28)</sup>という倫理を人間化への重要な一歩として考える者がいる。

社会的な動物には個体選択では説明できない特徴がみられるとして、群選択の分析が論題になってきた。しかし、群を選択標的として分析する場合、つぎの4区分を別々に扱う必要があり、人間に特有の倫理の進化は、ここでいう区分④に密接に関連しているという<sup>(29)</sup>。①ハミルトニアン群。これは、拡大された家族からなる血縁群である。②ライティアン群。これは、群選択分析におけるそもそもの標的（単位）であり、一時的に隔離されているが、いずれ種個体群の母体あるいは他のライティアン群と融合することになる地域デーム（deme）である。③マイリアン（創始者）群。これは、完全に隔離されており、隔離機構を獲得し、側所的ないし同所的となるまでは他の群と競合関係をもつことはない。④人間文化群。これは、部族的習慣、超自然的信仰、言語あるいは方言、そしてリーダーシップによるまとまりのような地域的集合体である。上記①から③の区分は、提唱者名からの名称化になっている。

そして、上記の区分④に関する選択過程モデルは、つぎのものがあるといわれる選択[過程]モデル<sup>(30)</sup>のうちの、③のタイプになる。①形質の遺伝的継承と形質の適応度差異、②上記①における形質の遺伝的継承の模倣（心脳と文化的伝達）への置換、③上記①の2

(26) Sober, E., 2000, pp. 124-125. 鍵括弧内の一部に筆者による加筆変更あり。

(27) Mayr, E., 1988, pp. 8-66, pp. 79-115.

(28) R. トリヴァース／中嶋康裕ほか訳, 1991, 444～485頁。以上が、互恵的利他行動の論議の発端になった。

(29) Mayr, E., 1988, pp. 116-131.

(30) Sober, E., 2000, pp. 213-220.

要素の垂直・水平・斜行的な模倣と慣性への置換。経済学の企業理論や進化論的認識論<sup>(31)</sup>にも、すでに③のタイプの選択モデルがあるとされる。

ただし、進化過程の説明力は、内因モデル、外因モデル、相互作用モデルという3つの純粹型のいずれかが、他に全面的に代替して高まることはない。すなわち、外在主義の現代総合論でいう自然選択と遺伝過程、内在主義の中立選択論でいう浮動（「ヒッチハイカー<sup>(32)</sup>」のような生物搭乗者）、そして相互作用主義のニッチ構築論、学習過程、文化過程の接合が必要である。選択螺旋のモデル化には、つきつけられるオッカムの剃刀（節減原理）を前にしても、補完化する上記各選択モデルの要素を多重化するだけの必然性がある。

#### 4 遺伝子-文化共進化論：ニッチ構築と生態的継承

人間の非文化過程よりも強力である文化過程は、他種の〔原〕文化過程に比べより体系的に累積的であり例外的に強力である。ゆえに、人間の文化過程は、自然選択に変更を加える場合がある——環界秩序-象徴秩序というあいだに、完新世から人類世に移行したとする結論づけ<sup>(33)</sup>がひとつの跡づけになる——として、生物進化と文化過程の相互作用を探究するものに、遺伝子-文化共進化論がある。ここで取り上げる遺伝子-文化共進化論<sup>(34)</sup>は、標準進化論に取って代わるものではない<sup>(35)</sup>が、人間種に特異化した進化論であり、選択螺旋の明示化に向かったものとして本論は評価する。

文化的継承を形式モデルに組み込むことに対しては、古典的社会生物学、進化心理学、人間行動生態学による遺伝的継承モデルにおいては不要な複雑化であると仮定されてきた。また、文化進化が遺伝的進化を駆動するには、遺伝子進化はあまりに遅く、文化進化は早すぎるという議論がある。しかしながら、これまでの理論解析によって、反証が提示されてきているという。また、文化過程が遺伝子進化の追いつけない速度で環境変化を生じさせる場合でも、環界秩序領域の進化上の反応が象徴秩序領域の文化的反応に切り替わっただけである（進化様式における文化進化の優勢）といい、文化過程からの進化上のフィードバックが何もなくなかったということにはならないとする。ゆえに、人間集団が共有する情報は、学習され文化過程に表出され、文化的継承というかたちをとり個人間で社会的に伝達され、それがフィードバックして人間の環境の選択圧に変更を加え、よって文化過程が人間の遺伝子に影響を及ぼし、他の種にまで影響を及ぼす可能性を仮定している点に、遺伝子-文化共進化論の特徴があった。

ただし、遺伝・文化的継承の2重継承モデル<sup>(36)</sup>では、文化的継承が遺伝子に影響を及ぼす介在過程がない。しかし、文化的継承が遺伝的継承に直接バイアスをかけるという仮定が妥当とはいえない場合がある。そこで、遺伝・文化・生態的継承の3重継承モデル（図

(31) G. フォルマー／入江重吉訳、1995。たとえば以上がある。

(32) Mayr, E., 1988, p. 146.

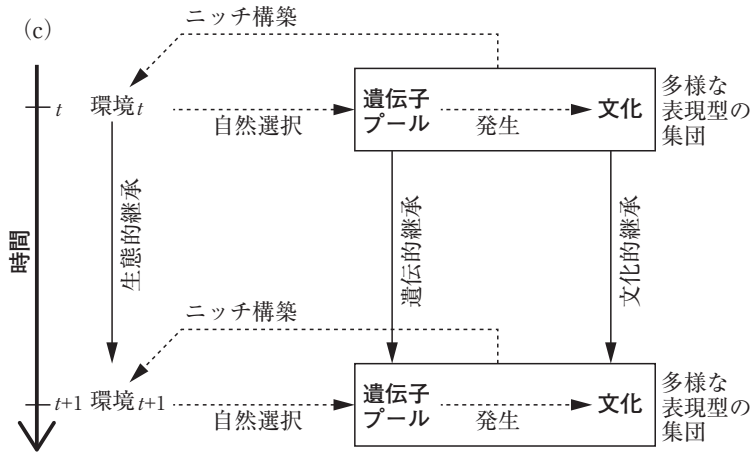
(33) Zalasiewicz, J. and et al., 2008, pp. 4-8.

(34) Odling-Smee, F. J., K. N. Laland, and M. W. Feldman, 2003. 以上の先行研究には以下などの文化進化論などがある。Cavalli-Sforza, L. L. and M. W. Feldman, 1981. J. リフィエ／河辺俊雄ほか訳, 1984。E. R. サーヴィス／松園万亀雄ほか訳, 1977。西山賢一, 1994。

(35) Adenzato, M., 2000, p. 146.

(36) Boyd, R., and P. J. Richerson, 1985, pp. 1-18.

図3 3重継承モデル



[出所] Odling-Smee, F. J., K. N. Laland, and M. W. Feldman, 2003, p. 245. 図(a) (b)は省略。

3)<sup>(37)</sup>に拡張され、遺伝的継承と文化的継承が相互作用において経由する、ニッチ（生態学的地位）という変更された選択圧の遺産化すなわち生態的継承がさらに考慮された。ニッチ構築のすべてが文化的であるわけではない。しかし、ニッチ構築への注目、遺伝的進化と文化的進化の関係に対して、つぎの意味をもつ。①ニッチ構築主体を「遺伝子のヴィークル」とみなせなくなる、②生命誌や自然誌から学ばれてきたが、生物が適応形質を備えていて、自身の環境のさまざまな状態を選び取り構築するニッチ（選択しつつ選択されている環境）は、遺伝的変異に直接起因していなくても、自然/社会選択に変更を加えうるといふ。

3重継承モデルでは、ニッチ構築と生態的継承がつぎのように定義されている。ニッチ構築とは、「生物体が、1つまたは複数の環境因子を能動的に変化させることによって、あるいは現在の時空位置において環境因子を物理的に擾乱するか別の時空アドレスに移住し従ってみずからを別の因子に晒すことによって、みずからと環境間の特徴-因子の関係を変更するときを生じる<sup>(38)</sup>」。生態的継承とは、「みずからと、両親または先祖の生物による先行的ニッチ構築の結果として選択圧が変化している環境との間での、特徴-因子関係への遭遇である<sup>(39)</sup>」。そして、ニッチ構築を、擾乱/移住、起動的/対抗的の交差により区分し、いずれもがプラスあるいはマイナスの効果を有するとした<sup>(40)</sup>。なお、ニッチについての先行研究<sup>(41)</sup>を踏まえると以下のようにいえる。第1に要求ニッチの隠れ家因

(37) Odling-Smee, F. J., K. N. Laland, and M. W. Feldman, 2003, pp. 239-281.

(38) Odling-Smee, F. J., K. N. Laland, and M. W. Feldman, 2003, pp. 41.

(39) Odling-Smee, F. J., K. N. Laland, and M. W. Feldman, 2003, pp. 42.

(40) Odling-Smee, F. J., K. N. Laland, and M. W. Feldman, 2003, pp. 44-48.

(41) Odling-Smee, F. J., K. N. Laland, and M. W. Feldman, 2003, pp. 37-39. 以上をまとめると以下のように整理できる。生態学者が用いる、エルトン、グリーンネル、ハッチンソンに由来するニッチの概念についてのシェーナーによる区分とライボールドによる区分を比較検討できる。ライボールドは、グリーンネルとハッチンソンが要求ニッチに注目し、エルトンは影響ニッチに注目していたとしたが、オドリ＝スミールも同じ点を強調した。一方、シェーナーは、グリーンネルとエルトンの上記の相違を認めた上で、その相違よりも類

子による定義、第2に影響ニッチの隠れ家因子による定義、第3に要求ニッチの総合因子による定義（のちにいう実現ニッチ（基本ニッチ））があった。第2のニッチと異なり第3のニッチは、特定集団を詳細に吟味した結果であるから予測できないが、ある集団のあるタイプの環界とも捉えられる。そして、影響ニッチを総合因子により定義する第4のニッチについての論議が必要にはなる。

「もし生命が周囲の状況を適応的な意図をもって変えるなら、生物はそうすることによって、見たところ生命のない周囲のものの生命の度合いを高めているといえるだろうか？」といい、生物の境界があいまいであり、体内生理作用に加え環境の適応的な修正の結果として生じる「体外生理作用」が確かにあることは熱力学の法則が生物の外皮で止まらないことを示すだけでいいとされていた<sup>(42)</sup>。そこで、生物種には独自の進化の来歴があり、個体が環境に負担をかけて生きることを可能にする相互作用は、①選択的環境に対する種に特有の適応、②個体が環境に対しておこなう発生上の反応基準に基づいた適応的調整という2つの観点からの説明だけで不完全となる場合の不備として、つぎの2点があげられた<sup>(43)</sup>。①外在主義がニッチ構築を種に特有の適応として説明することは、すべての生物に共通するニッチ構築の性質を間接的に割り引いており、その普遍的な属性が分かりにくくなってしまう。②生物の適応に注目しすぎて、ニッチ構築生物によって生じる環境変化にほとんど目を向けておらず、環境変化が生物進化そのもののもうひとつのあらわれとみなされることはめったになく、外在主義において共進化、生態的継承、エピジェネティクスが適用されることはない。そこで、生物と環境の双方向の動的過程の産物といえる動的適合につながる第2の進化ルートを対象にする構築・構成主義（外在主義と相互作用主義の融合）が登場する。

以上を踏まえ、数世代にわたる物理学者がマクスウェルの悪魔にあてがった特性がニッチ構築の普遍的特性についての最も利用可能なガイドになる、という基盤前提を提起したうえで思考をめぐらせ、ニッチ構築は、進化の第2の選択的過程に他ならないと結論づけた<sup>(44)</sup>。ニッチ構築と自然選択が対照化されているので、以下に左方をニッチ構築、右方を自然選択として示す<sup>(45)</sup>。①能動的エージェント－反応的環境エージェント、②短期的な有益性追求－物理・化学法則に追従、③短期的な適応度促進－無目的・無差別的な冷淡さ、

---

似性の方が重要だとして、グリーンネルとエルトンはともにニッチを群集の中のほぼ不変の場所ないし隠れ家とみなし、ともに餌や微小生息場所の因子を含めると指摘した。これに対し、ハッチンソンは、ニッチを生物体に作用する環境因子の総和であり、ニッチは $n$ 次元超空間の中の領域であるとした。のちにハッチンソンは、それぞれの種の $n$ 次元超空間をその種の基本ニッチとし、ある種の実現ニッチは、その種の基本ニッチのうち、他種の基本ニッチと重複しない部分と、重複する部分のうちの当該種が存続できる部分を加えたものであるとした。シェーナ－は、ハッチンソンがニッチを占有者とのかわりにおいてのみ定義できるものと捉えているといい、また、ハッチンソンによれば占有者のニッチ属性は可変的であり、したがってニッチの進化について考えることが可能になるという。また、エルトンのニッチは多くの種が占めるが、ハッチンソンのニッチは単一集団のみが占める。

(42) Turner, J. S., 2000, pp. 1-39.

(43) Odling-Smee, F. J., K. N. Laland, and M. W. Feldman, 2003, pp. 170-171.

(44) Odling-Smee, F. J., K. N. Laland, and M. W. Feldman, 2003, pp. 172-178. 絵図が用いられ、実に引き込まれる記述になっているが、本稿では当該箇所と言及を割愛する。また同書第9章（pp. 337-369）の記述については、いまここでよりも本論モデルを後稿で提示するときに取り上げる。

(45) Odling-Smee, F. J., K. N. Laland, and M. W. Feldman, 2003, pp. 178-179. 筆者による変更あり。



④拡張表現型が標的－遺伝子型が標的, ⑤情報に基づく制御－盲目的制御, ⑥先取的（プロアクティブ）行為－事後反応。

しかしすでに、発生システム論におけるエピジェネティクス, 進化発生学における発生生物学と進化生物学の統合, そしてシステム生物学における相互作用主義などが、先行の理論枠組み以上の説明原理を提起すると主張している。これらのユニークな現代総合論からの変容面を損なわずに、発生, 生態, そして進化についての総合（「第3段階の総合」）を目指し、あらたな提言に向かう生態進化発生論は、遺伝子－文化共進化論の3重継承モデルの説明力をさらに高めるなど、社会科学への波及的影響を強めるであろう。

## おわりに

継続的に変化している世界で永遠に走り続ける赤の女王がとどまろうとしている「同じ場所」<sup>(46)</sup>を、「流動する半保守的システム」であるとして思い描いてみる。そのとき彼女は、ひたすらに走りながら、絡みをときほぐそうとしているのか、そのままに絡めとろうとしているのか、あるいは……。筆者の真意は、もはや伝わったであろう。

構造－現象－解釈に関しては、本論が付加する生態進化発生論, 記号学－記号論－生命記号論という内容にもかかわり、後稿でも言及する。

## 〔引用参考文献〕

- Adenzato, M., 2000, "Gene-Culture Coevolution does not Replace Standard Evolutionary Theory," *Behavioral and Brain Sciences*, 23(1), pp. 146.
- Arrow, K. J., 1974, *The Limits of Organization*, 1st ed., W. W. Norton & Company. (村上泰亮訳, 1976, 『組織の限界』岩波書店)。
- Bohm, D., 1980, *Wholeness and the Implicate Order*, Routledge & Kegan Paul. (井上忠雄ほか訳, 2005, 『全体性と内蔵秩序』青土社)。
- Boyd, R., and P. J. Richerson, 1985, *Culture and the Evolutionary Process*, The University of Chicago Press.
- Burt, R. S., 1992, *Structural Holes: The Social Structure of Competition*, Harvard University Press. (安田雪訳, 2006, 『競争の社会的構造：構造的空隙の理論』新曜社)
- Cavalli-Sforza, L. L. and M. W. Feldman, 1981, *Cultural Transmission and Evolution: A Quantitative Approach*, Princeton University Press.
- Dawkins, R., 1982, *The Extended Phenotype: The long Reach of the Gene*, Oxford University Press. (日高敏隆・遠藤彰・遠藤知二訳, 1987, 『延長された表現型』紀伊國屋書店)。
- Ford, J. D. and R. W. Backoff, 1988, "Organizational Change In and Out of Dualities and Paradox," in Quinn, R. E. and K. S. Cameron, eds., 1988, *Paradox and Transformation: Toward a Theory of Change in Organization and Management*, Ballinger Publishing,

---

(46) Van Valen, L., 1973. pp. 17-19.

- pp. 81-121.
- Farjoun, M., 2010, "Beyond Dualism: Stability and Change as a Duality," *Academy of Management Review*, 35(2), pp.202-225.
- Gilbert, S. F. and D. Epel, 2009, *Ecological Developmental Biology: Integrating Epigenetics, Medicine, and Evolution*, Sinauer Associations Inc.
- Juarrero, A., 2002, *Dynamics in Action: Intentional Behavior as a Complex System*, The MIT Press.
- Lewontin, R. C., 1970, "The Units of Selection," *Annual Review of Ecology and Systematics*, 1, pp.1-18.
- Marsden, R., 1993, "The Politics of Organizational Analysis," *Organization Studies*, 14(1), pp .93-12p4.
- Mayr, E., 1988, *Toward a New Philosophy of Biology: Observations of an Evolutionist*, Harvard University Press. (八杉貞雄・新妻昭夫訳, 1994, 『進化論と生物哲学：進化学者の思索』東京化学同人)
- Odling-Smee, F. J., K. N. Laland, and M. W. Feldman, 2003, *Niche Construction: The Neglected Process in Evolution*, Princeton University Press. (佐倉統ほか訳, 2007, 『ニッチ構築：忘れられていた進化過程』共立出版)
- Powell, W. W. and P. J. DiMaggio, eds., 1991, *The New Institutionalism in Organizational Analysis*, The University of Chicago Press.
- Sober, E., 1984, *The Nature of Selection: Evolutionary Theory in Philosophical Focus*, The University of Chicago Press.
- Sober, E., 2000, *Philosophy of Biology*, 2nd ed., Westview Press. (松本俊吉ほか訳, 2009, 『進化論の射程：生物学の哲学入門』春秋社)
- Turner, J. S., 2000, *The Extended Organism: The Physiology of Animal-Build Structures*, Harvard University Press. (滋賀陽子訳・深津武馬監修, 2007, 『生物がつくる<体外>構造：延長された表現型の生理学』みすず書房)
- Vandermeer, J. H. and D. E. Goldberg, 2003, *Population Ecology: First Principles*, Princeton University Press.
- Van Valen, L., 1973, A New Evolutionary Law, *Evolutionary Theory*, 1, pp. 1-30.
- Zalasiewicz, J. and et al., 2008, "Are We Now Living in the Anthropocene?" *GSA Today*, 18(2), pp. 4-8.
- A. バーマン／立崎秀和訳, 1993, 『ニュー・クリティシズムから脱構築へ：アメリカにおける構造主義とポスト構造主義の受容』未来社。
- C. ベルギー／折島正司訳, 2003, 『ポスト構造主義』岩波書店。
- C. マラテール／佐藤直樹訳, 2013, 『生命起源論の科学哲学：創発か、還元論的説明か』みすず書房。
- C. レヴィ＝ストロース／荒川幾男ほか訳, 1972, 『構造人類学』みすず書房。
- C. レヴィ＝ストロース／大橋保夫訳, 1976, 『野生の思考』みすず書房。
- C. レヴィ＝ストロース／三好郁朗ほか訳, 1979, 『構造・神話・労働』みすず書房。
- C. ムフ編／青木隆嘉訳, 2002, 『脱構築とプラグマティズム：来たるべき民主主義』法政

大学出版局。

- C. S. パース著／C. ハートショルン, P. バイス編／米盛裕二編訳, 1985, 『現象学』 勁草書房。
- D. トンプソン／柳田友道ほか訳, 1973, 『生物のかたち』 東京大学出版会。
- E. フッサール／細谷恒夫ほか訳, 1995, 『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』 中央公論新社。
- E. R. サーヴィス／松園万亀雄ほか訳, 1977, 『文化進化論：理論と応用』 社会思想社。
- G. ドゥルーズ／中村雄二郎訳, 1975, 「構造主義はなぜそう呼ばれるのか」 F. シャトレ編著／中村雄二郎監訳『シャトレ哲学史Ⅷ 20世紀の哲学』 白水社, 332～371頁。
- G. ドゥルーズ／財津理訳, 2007, 『差異と反復（上・下）』 河出書房新社。
- G. フォルマー／入江重吉訳, 1995, 『認識の進化論』 新思索社。
- G. W. ライプニッツ／清水富雄ほか訳, 2005, 『モノドロロジー：形而上学叙説』 中央公論新社。
- H. ロムバッハ／中岡成文訳, 1983, 『存在論の根本問題』 晃洋書房。
- H. ロムバッハ／酒井潔訳, 1999, 『実体・体系・構造』 ミネルヴァ書房。
- J. B. ファージュ／加藤晴久訳, 1972, 『構造主義入門：理論から応用まで』 大収館書房。
- J. クリシュナムルティ／大野純一・聖真一郎訳, 1986, 『生の全体性』 平河出版社。
- J. デリダ／若桑毅ほか訳, 1977, 『エクリチュールと差異（上）』 法政大学出版局。
- J. デリダ, J. D. カプート編／高橋透ほか訳, 2004, 『デリダとの対話：脱構築入門』 法政大学出版局。
- J. デリダ／林好雄訳, 2005, 『声と現象』 筑摩書房。
- J. パークリー／大槻春彦訳, 1958, 『人知原理論』 岩波書店。
- J. ラカン／宮本忠夫ほか訳, 1972, 『エクリⅠ・Ⅱ』 弘文堂。
- J. リフィエ／河辺俊雄ほか訳, 1984, 『生物学から文化へ2：ヒトの出現』 みすず書房。
- M. セール／竹内信夫訳, 1985, 『ライプニッツのシステム』 朝日出版社。
- M. ハイデッカー／細谷貞雄訳, 1994, 『存在と時間（上・下）』 筑摩書房。
- M. ポンティー／滝浦静雄・木田元訳, 1964, 『行動の構造』 みすず書房。
- M. ミンスキー／安西祐一郎訳, 1990, 『心の社会』 産業図書。
- M. モース／吉田禎吾・江川純一訳, 2009, 『贈与論』 筑摩書房。
- P. リクール／久米博ほか訳, 2005, 『解釈の革新』 白水社。
- R. トリヴァース／中嶋康裕ほか訳, 1991, 『生物の社会進化』 産業図書。
- R. ドーキンス著／日高敏隆ほか訳, 1980, 『生物＝生存機械論』 紀伊國屋書店。
- R. ドーキンス著／日高敏隆ほか訳, 2006, 『利己的な遺伝子』 紀伊國屋書店。
- 浅田彰, 1983, 『構造と力』 勁草書房。
- 小田亮, 1989, 『構造主義のパラドクス』 勁草書房。
- 久米博, 1978, 『象徴の解釈学：リクール哲学の構成と展開』 新曜社。
- 久米博, 2012, 『テキスト世界の解釈学：ポール・リクールを読む』 新曜社。
- 西山賢一, 1994, 『文化生態学の冒険：ヒト社会の進化と適応ネットワーク』 批評社。
- 橋爪大三郎, 1988, 『はじめての構造主義』 講談社。
- 橋本努, 2008, 『経済倫理：あなたは何主義？』 講談社。

長谷川博, 2012, 「社会交変換論Ⅰ：選択螺旋と行動相互作用」『国府台経済研究』第22巻第2号, 127～145頁。

長谷川博, 2013, 「社会交変換論Ⅱ：[超]組織個体記述の進化論, システム論, そして生態学へ」『千葉商大論叢』第51巻第1号, 41～61頁。

丸山圭三郎, 1981, 『ソシユールの思想』岩波書店。

渡邊二郎, 1994, 『構造と解釈』筑摩書房。

(受理日：平成26年7月31日)

(校了日：平成26年9月16日)



## 〔抄 録〕

まずは、社会科学にとっての不都合な真実と好都合な真実といわれること、ホーリスティックな認識論的転回、実体概念のぼやけと関係子・相互作用子に言及しつつ、系統論的ホーリズム（全包括主義、亜総体主義）の認識論とこれが関係主義を方法論とする所以に言及した。つぎに、日本のモダン、ポストモダンにかかわり、離合する構造論、現象学、解釈学を踏まえつつ、関係主義がどのように行われるかという性格づけ（方法の方法）を決定する、構造 - 現象 - 解釈の2項対立縮約、そして3点動化、「構造」の在処の区分に言及した。そして、還元論的進化論と構造論的進化論が交差、接合する拡張進化論、それとしての遺伝子 - 文化共進化論に言及した。

